

『春 暁』 孟 浩然

春の季語に

春ともなれば私達がくちずさむ「春眠暁を覚えず」は唐詩の中でも広くよく親しまれ、日常生活化された語句ではないだろうか。

俳句の世界では「朝寝」といえば春の季語ですがそれは孟浩然の五言絶句に由来するようである。

俳人の水原秋桜子の句がある。

朝寝せり孟浩然を始祖として

春 暁 孟浩然

春眠不覺暁 春眠暁を覺えず

處處聞啼鳥 處處啼鳥を聞く

夜來風雨聲 夜來風雨の聲

花落知多少 花落つること知んぬ多少ぞ

意 解

ころよい春のねむり、うっかりねすごして夜のあけたのも知らない。目が覚めてみれば、朝はすでにみちているらしく鳥の鳴き声が、あちこちから聞こえる。ベッドの上に横たわったまま、きようはよい天気であることを思う。

しかし昨夜から今朝にかけては相当の嵐であった。嵐のあとのきょうの日よりは、いっそう快いであろう。しかし気にかかるのは、咲きほこっていた庭の花。昨夜の嵐でどれだけ散ったことであろうか。

隱棲閑居は悠々自適か

当時、詩人を含む知識人はおおむね高級官僚であって出勤時間も早い。朝廷への出仕は早暁だから夜の明けたことも知らず春眠をむさぼることは無理で、宮仕えを辞してこそ可能な心境だろう。こんなのどかな詩を詠んだ作者は功成り、名を遂げた豊かな境遇の人だったのだろうか。

孟浩然(六八九―七四〇)盛唐の詩人。湖北省襄陽の人。若くして節義を好み、交遊を重んじ、人の艱難をわが身を顧みず救った。弟の洗然と共に文名は知られていた。

玄宗の開元の初め、三十歳で進士の試験を受けたが及第せず、(四十歳という説も) 四十歳の時、長安に出たおり、張九齡や王維に詩才を認められ親交を結び、張九齡が荊州の長官になったとき、部下として働いたが、死亡(辞職という説も)に伴い官を辞し故郷に帰った。

開元二十八年、南方に左遷させられていた王昌齡が赦されて北へ帰る途中、孟浩然を訪問した。その時、浩然是デキモノ(腫瘍)で病んでいたが無理に酒食をとにしたのが悪く、後に容態が悪化し亡くなった。

教本にはこの五言絶句と「臨洞庭」の五言律詩が掲載されているが、杜甫の「登岳陽樓」と並んで洞庭湖を詠じた傑作であるといわれている。

詩文の中で「呉楚東南坼 乾坤日夜浮」「氣蒸雲夢澤 波撼岳陽城」はスケールの大きな洞庭湖の景観を如実に写しだしている。

しかし後半四行はスケールの大きな洞庭湖を目の前にして、舟も楫もなく、太平の御世に何もせず、ただじつとして自己

浩然とて標は岳陽城
妙時間過私舟楫月新
露落葉聲眠詩吟金衣
界河從東漢河漢珠宮漸
標桐車馬飲其有餘



孟浩然 (晚咲堂画伝)

が恥ずかしい。(在野の身を役人として引き立ててくれる者がいない)「徒有羨魚情」は仕官したい気持ちの表れで、官途に不遇だった嘆きが聞こえてきそうです。

又、詩名に反して出世から遠い不遇感は「不才明主に棄てられ 多病故人に疎んぜらる。白髮年老を催し 青陽歳除に迫る。」(才覚がない私は明察の主である帝からも拾われることもなく、多くの病氣持ちで親しかった友人達からも疎んぜられている。白髪がふえて早くも老いづき、人生の春はたちまち年の暮れに迫っている。)
「歳暮南山に歸る」という詩にも表れている。

詩人たちの評価

李白の詩「孟浩然に贈る」に「吾は愛す孟夫子、風流は天下に聞こゆ……花に迷うて君に事えず。」(孟先生の風流人としての名声は天下に鳴りひびいている……花の美しさを愛でるのに忙しく、偉い人に仕える暇がないのでしよう。)
杜甫の詩「悶えを解く」に「復た憶う襄陽の孟浩然、清詩句句尽く伝うるに堪えたり」(孟浩然の清新な詩はその一句一句をすべての人々に、また後世に伝える値打ちがある。)

これ等の詩から役人というよりも、詩人として評価されていたのではないだろうか。

訳詩の紹介

土岐善麿訳

春あけぼののうすねむり
まくらにかよう鳥のこえ
風まじりなる夜べの雨
花ちりけんか庭もせに

※「庭もせに」は庭がせまくなるほど、庭いっぱいいの意。

井伏鱒二訳

ハルノネザメノウツツデ聞ケバ
トリノナクネデ目ガサメマシタ
ヨルノアラシニ雨マジリ
散ツタ木ノ花イカホドバカリ

結句の読み方・解釈

結句の「花落知多少」にいろいろな読み方がある。

- 一 花落つること知んぬ多少ぞ
- 一 花落つること多少なるを知る
- 一 花落つること知らず多少い
- 一 花落つること知る多少ぞ
- 一 花落つること知多少いぞ

日本語で「多少」は多少のことはがまんしなさいとか、その事については多少知っているといるという様に「少し」の意

味で使われています。

中国語ではどの様に解釈されるか。

一、杜牧の詩「江南春望」に「南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中」とあります。南朝とは南北朝時代（東晋が滅んだ後、宋と北魏とが南北に対立するようになってから隋が天下を統一するまでの百五十年間）の南朝のことであって、宋・齊・梁・陳の四王朝をいう。特に梁（五〇二―五五七）の時代、仏教の最盛期で「南朝四百八十寺」といわれるとおりに建康（今の南京）は仏寺でいっぱいだった。

この場合「多少」の「少」は帶字であって意味をもたない。だから「多少の」が「多くの」という意味であるならば「春曉」における「多少」もその様に解釈したい。（「漢詩名句 はなしの話」駒田信二）

一、「多少」には①たくさん（少は帶字）、②すこし（多は帶字）、③どれほど、の三通りの意がある。ここでは、「知る多少」と読んで①の意にとつてもよいが、③に従ったほうが含蓄のある表現となるであろう。（中国名詩鑑賞辞典」山田勝美）

一、中国語で「多少」は「どのくらい・いかほど」という疑問詞。「たくさん」という説もありますが、疑問詞と考えた方がよい。（「漢詩入門」一海知義）

一、「知多少」は多少なるを知らんや、従って実は「不知多少」、多少なるを知らずの意である。ある解釈には

多少とは多きことといい、たくさん散りしいたであろうと説いているが、そうでない。「新唐詩選」吉川幸次郎・三好達治)

鑑賞

この詩は起句で、ただちに主題を述べ、承句で叙景、転・結の二句に惜春の意があると、明の人の評であるが、服部南郭は「なんの意もないような詩なれども、真景、実に妙悟せる者にあらずんば言ふあたはず」といつている。

起句・承句で「明」から転句の昨夜からの風雨の回想へと「暗」に転じ、結句の庭に散りしく花びらの「明」で結んでいる詩の構成、また、まどろみ・鳥の声・風雨、落花と晩春のイメージを網羅している構成は晩春の景そのものである。

その中で主点は、結句の解釈だともわれる。「知多少」を「多く・たくさん」と量の断定的な推量として解釈するよりも「どれだけ・いかほど」という量の不確定な推量と解釈したほうが、落花により行く春への哀惜の情を喚起させる余韻があるように思われる。

春の朝は、暗いうちから鳴きかわす鳥の声で明ける。早春の候ではまだまなな鳥の声も、仲春の候ともなればここかしこと鳴き、桃李も花咲きはじめ、鶯も鳴きやがて杜鵑が鳴くころには春は深まり、日ごとに暖気はつ



春曉（「唐詩画譜」）

て、桃李の花々がつぎつぎに散り落ちる晩春の候となる。

中国の詩文に描かれる春の朝は、仲春以後、晩春のそれを主とし、感情は時候を反映して明るさと同時に、倦怠感を帯びる。朝の倦怠をわがものにしうるのはほほみな役所勤めとは無縁の人々、隠棲閑居の自由な解放感が内包されているからである。

一方では何もすることもなく、無為に時を過ごす空しさに自嘲ともとれる詩語の表現は江南各地を放浪した果ての事だったのだろうか。

その後、郷里に帰った孟浩然は襄陽の郊外鹿門山に隠棲し、人事、自然のうつろいがあるがままに受け入れられるようになって、初めて悠々自適な心境になりえたのではないだろうか。